



TITLE:

林黛玉論：日常的解體を越えんと
して

AUTHOR(S):

小濱, 陵一

CITATION:

小濱, 陵一. 林黛玉論：日常的解體を越えんとして. 中國文學報 1976, 26:
44-78

ISSUE DATE:

1976-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177321>

RIGHT:

林黛玉 論

——日常的解體を越えんとして——

小 濱 陵 一
京 都 大 學

I

《紅樓夢》の展開される主要な舞臺《大觀園》は、一口に言えば「少女」の世界である。《我半世親睹親聞の這幾個女子》（第二回）が實在したことはおおよそ疑いのない所であり、従つて作者の直接體驗が作品世界の形成に大きく貢獻したことも間違いないと考えられる。⁽¹⁾然しながら、作品の世界がそのまま直接體驗の世界に還元されることはあり得ない。⁽²⁾

年輕の貴族少女們、雖然也正在受着封建思想的教育和影響、但是她們還沒有直接參與封建家庭的和社會的事務、貴族統治者の殘暴和腐朽對她們的熏陶還較少。因此、在她們的青春生命裏畢竟還閃耀着天眞的色彩。⁽³⁾

年若き貴族少女達は、正に封建思想の教育と影響を受けつつあるものの、彼女達はまだ封建家庭及び社會の職務に直接參與することなく、貴族統治者の殘虐と腐朽が彼女達に對して行なう熏陶もまだ比較的少ない。そこで彼女達の青春の命には畢竟まだ無邪氣な色彩が輝いている。

《紅樓夢》の少女世界を考えるに際して、右の指摘は、《親睹親聞の這幾個女子》を作品世界の主要な構成體に異質化していく、そうした過程の社會的背景に觸れる點で注目値する。現實社會に於いて、禮教規範の緊縛の最も緩かな部分である「少女」達は、例えば令嬢と侍女といった上下關係を希薄化するなど、自らに課せられた現實的制約をも遙かに越えた「自由な」生活を繰り廣げながら、その世界《大觀園》を謳歌する存在として造型されている。⁽⁴⁾

然しながら、《婦女在封建社會裏處在被壓迫的最底層》⁽⁵⁾という史實に反して、彼女達が《紅樓夢》の世界で無上の地位を占めたとしても、それは現實の社會構造と全面的に敵對するものとはならない。自らの生み出した作品世界を現實と眞つ向から對決させる程、曹雪芹の情況認識は安直

ではない。「男尊女卑」の鮮かな轉倒は、嚴然たる「男尊女卑」の意識構造を保ちながら横たわる現實と、正面切つて對決するからではなく、皮肉にも轉倒が鮮かであればある程、正反對の世界である現實の落とし子として、現實にそっくり包攝されてしまうからこそ、實際に日常生活そのものを揺り動かすことのない觀念上の遊戲という形で受け入れられもするという點を、彼は決して見逃さなかつた。その鋭い洞察は、冒頭の抱負の中に明確に現われている。

市井俗人喜看理治之書者甚少、愛看適趣閒文者特多。歷來野史、或訕謗君相、或貶人妻女、姦淫凶惡不可勝數；更有一種風月筆墨、其淫污穢臭、荼毒筆墨、壞人子弟、又不可勝數；至若佳人才子等書、則又千部共出一套、且其中終不能不涉於淫濫、以致滿紙潘安子建西子文君、不過作者要寫出自己的那兩首情詩艷賦來、故假擬出男女二人名姓、又必旁出一小人其間撥亂、亦如劇中之小丑然、且鬻婢開口、即者也之乎非文即理。故逐一去看、悉皆自相矛盾大不近情理之說、竟不如我半世親睹親聞的這幾個女子、雖不敢說強似前代所有書中之人、但事跡原委亦可

以消愁破悶、也有幾首歪詩熟詞可以噴飯供酒；至若離合悲歡、興衰際遇、則又追蹤躡跡、不敢稍加穿鑿、徒爲哄人之目而反失其眞傳者。今之人、貧者日爲衣食所累、富者又懷不足之心、縱一時稍閒、又有貪淫戀色好貨尋愁之事、那裏有工夫去看那理治之書。所以我這一段故事、也不願世人稱奇道妙、也不定要世人喜悅檢讀、只願他們當那醉淫飽臥之時、或避事去愁之際、把此一玩、豈不省了些壽命筋力、就比那謀慮逐妄、卻也省了口舌是非之苦、腿脚奔忙之苦；再者亦令世人換新眼目、不比那些胡牽亂扯忽離忽遇、滿紙才人淑女女子建文君紅娘小玉等、通共熟套之舊稿。（第一回）

市井の俗人で喜んで堅苦しい書物を読む者はとても少なく、好みに合った手遊びてあそびの文章を愛讀する者が多いのです。從來の野史は、君主大臣を謗るか、他所よそ様の妻君や娘むすめ子を貶しめるかで、その姦淫凶惡なこときたら數えられたものじゃありません。更に色戀の書というのがありまして、その淫らでけがらわしい鼻つまみの毒筆は、他所様の御子弟を臺無しにし、これまた數え切れません。才子佳人などの物語となりま

すとこれまた千篇一律、中味も淫濫でないものはなく、全篇通じて潘岳・曹植・西施に卓文君の御登場。ただ作者は己が二つ三つの艶っぽい詩賦を書きつけたばかりに、男女二人の名前をことさらひねり出しているのです。その上かならず一人の小者を添えて二人の間をひっかき回すことときたら、芝居の道化役同然。おまけに出て来る侍女が口を開けば「者也之乎」のもったいぶりようで、チャラチャラ美文でなければコチコチ理づめのお堅い調子。ですから逐一見てまいりますと、どれもこれも自己矛盾を來してまったく情理からかけ離れ、結局わたくしが半生の間親しく見聞したこの幾人かの女性達に及ばないのです。彼女達、前代のどの書物の登場人物よりも勝るなどとは申しませんが、その行狀の一部始終は憂き晴らしにうってつけ、何首かの出來損いやらありふれた詩詞の類も、吹き出し笑いを誘い酒の肴にもなれるでしょう。別れ出會いの泣き笑い、繁盛没落のめぐり會わせともなりますと、これまた事實のままでして、穿鑿を加えて徒らに人の目を欺き、却って真相を傳え損うなどということのないようにいたしました。當世の御仁ときたら、貧乏人は日々衣食に累わされ金持ちはまた不足の心を抱き、たとえちよっとした

暇があつても、またもや色の道に溺れ込み、物欲しさから要らざる心配を抱え込むことになっており、どこにあの堅苦しい書物を読む暇がありましようか。そこでわたくしのこの物語は、奇だの妙だのと讃められることを願わず、世人に悦に入つて細かに讀んでいただこうとも思いません。ただあの方が酒色にも飽きてゴロンとしている時、俗事を避けて憂き晴らしをする際に、これをサーッと味わいましたなら、壽命もすり減らさず餘計な力を使わなくてもすみますまいか？例の嘘偽りをめぐらし、デタラメ事を追っかけ回すのに比べまして、口先で言い争うわずらいや、足をバタつかせての苦勞も省けることでしよう。それに世人の耳目を一新させる點でも、ああしたやたらこじつけが多く、離れたと思う間もなく御對面、全篇才子佳人たる曹植・卓文君・紅娘・霍小玉といった、一切の型に嵌まった古くさい筋書のようなものではございませぬ。

《史太君破陳腐舊套》という回目の下、賈母の口を借りて改めて手厳しく批判された《佳人才子等書》⁽⁶⁾に於いては、確かに容貌・才能・地位・名譽・富といった要素がもたら

している不平等な現實を、すべて最上の部分へ解消してしまつた上での「樂しめる世界」が展開されている。つまりその世界は、榮耀榮華を約束する現實的要素を、單に食欲に取り込んであれやこれやと並べ立て、見せびらかしているに過ぎない。そしてそうした意味でのみ「現實離れ」した世界に遊ぶ時、讀者もまた自らの強いられた不平等な現實を斷ち切っていく。ともに、一方で徹底的に現實と密着し、その故もあつて他方であつたりと現實を排除した作品と讀者の結びつきは、「安定」こそしておれ、「無力」なものと言える。

《佳人才子等書》を批判しながら、實際、曹雪芹は讀者のそうした態度についても觀察を怠っていない。《我這一段故事、也不願世人稱奇妙、也不定要世人喜悅檢讀》という言葉は、讀者に對してひどく控え目な態度を取っているように見えるが、それは危惧の念の裏返された表現として、より積極的にとらえて差し支えなく思われる。なぜなら、《大觀園》という少女世界の原像（本來あるべき姿）が、現實から隔離された「汚れなき世界」として設定されている

る以上、その描寫は、讀者によつて終始一貫完全に現實から遮斷された（され切つた地點から初めて讀者にとって意味をもつようになる）幻想としてとらえられ、その故に曹雪芹が厳しく批判したあの《佳人才子等書》と同様に、現實そのものに對して無力化させられる危険性を多分に内包していたからである。つまり《大觀園》への現實の浸透——《大觀園》の日常的解體を描きつくす中に籠められた曹雪芹の鋭い現實認識は、全く理解されないままに終つてしまいかねない。とすれば、《只願他們當那醉淫飽臥之時、或避事去愁之際、把此一玩》という言葉は、作者としての單なる謙遜を越えた、讀者に對する誤たぬ認識と言えるのではないだろうか？　ここには、《令世人換新眼目》という自負も空しく、筋違いの無用な稱賛を受けて愛讀される位なら、氣分轉換程度に何となく讀まれた方がまだマシだといった皮肉が潜んでいるのかも知れない。ともあれ結果的に、《紅樓夢》及び曹雪芹は、その思想を根底から解體されるという屈辱を味わい續けてきたと言えよう。⁽⁷⁾

II

《紅樓夢》の著名な研究家俞平伯氏は、作者の態度を次の三點にまとめている。

- (1) 自分の境遇を感嘆したものである
- (2) 色戀の世界を懺悔して作ったものである
- (3) 十二釵のためにこの傳記を作ったものである⁽⁸⁾

俞氏は《紅樓夢》の冒頭第一回と第二回を、作品を読み通す上での鍵とみなし、その兩回から自分の見解の例證となりそうな文章を多く拾い上げているのだが、これに對して李希凡・藍翎の兩氏は《評『紅樓夢研究』》の中で次のような批判を加えた。

這樣的結論一方面抹殺了作者積極的思想和《紅樓夢》的現實意義；另一方面、這三個結論只是作者部分的動機、而書中所表現的內容和客觀效果却遠遠超過了這部分動機、有着更深厚的社會內容。

このような結論は一方では作者の積極的思想和「紅樓夢」の現實的意義を抹殺してしまうし、他方この三つの結論は作者

の部分的動機に過ぎず、物語の中に表現された内容と客觀的效果は遙かにこの部分的動機を越え、更に深みのある社會內容をはらんでいる。

李・藍兩氏の批判の當否はひとまず置くとして、俞氏の指摘した三つの點は、創作の動機としては確かに有力であるかも知れない。ただ「自傳說」を主張した俞氏に於いては、こうした動機が創作過程全體を支配することになり、従つて次のように結論づけられてしまう。

既曉得是自傳、當然書中底人物事情都是實有而非虛構；既有實事作藍本、所以紅樓夢作者底惟一手段是寫生。⁽¹⁰⁾

自傳であることが明らかな以上、もちろん物語中の人物事件はすべて實在したものであつて虚構ではない。タネとした實在の事件があつたからには、「紅樓夢」の作者の唯一の手法は寫生である。

作者を《一面公平的鏡子》⁽¹²⁾と規定すると、彼の外化された意識が文字に固定されて、それが「實在」であるかのやうに自己意識の外に「作品」として生成され、生成されたものが自己意識に反作用をおよぼし、もどつてくるという

一連の動きの繰り返しの、創作過程に於ける重要性は全く
脱落してしまうことになる。「書く」ことによって文字に
固定された表現意識への、新たな表現意識を考えに入れな
い限り、『披閱十載、增刪五次』(第一回)という一見さり
氣ない言葉や、『滿紙荒唐言、一把辛酸淚、都云作者癡、
誰解其中味』(第一回)という訴えを十分に理解することは
困難なのではあるまいか? 『寫生』に關する李・藍兩氏
の批判も同じく『評『紅樓夢研究』』に述べられているが、
作品に託された作者の思想を積極的に評價していこうとす
る點で、こうした批判は正當かと思われる。

描かれた世界の故に、また作者の傳記の故に、作品と作
者の相互獨立性を認められなかった『紅樓夢』及び曹雪芹
にとって、一九五四年以降の所謂「紅樓夢論爭」は、作者
の思想が彼の強いられれた情況を擔いつつ、作品として結實
していく過程に着目した點で、確かに大きな意義をもった
に相違ない。然しながら、強いられれた情況を越えんとする
部分の斬り捨て、「封建」體制を通じて封建「體制」に挑
み續けた作者の苦闘に對する無理解は、自分達は先進的な

階級であるから、その文學觀もまた先進的なものであると
いう先驗性を剥出しにした論評として現われている。

大觀園中の悲劇、畢竟有它的歷史的和階級的局限性、對
於社會主義時代的讀者來說、早已失去了現實意義。¹⁴⁾

大觀園中の悲劇は、畢竟その歷史的階級的限界性をもってお
り、社會主義時代的讀者に對して言へば、とくに現實的意
義を失っている。

賈寶玉和林黛玉の時代早已過去了。不僅壓迫賈寶玉和林
黛玉的貴族統治者已經被人民送進了墳墓、就是賈寶玉和
林黛玉的叛逆思想和他們的愛情方式、也早已成爲歷史的
陳迹了。¹⁵⁾

賈玉と林黛玉の時代はとくに過ぎ去ってしまった。賈寶玉
と林黛玉を壓迫した貴族統治者がすでに人民の手によって墓
に送り込まただけでなく、賈寶玉と林黛玉の叛逆思想と彼
等の愛情のスタイルでさえも、とくに歷史的事跡と化して
しまった。

文學が作者の個性に根ざしている限り、その才能の開花
はイデオロギーとは何の關係もない。また作者が常に時代

の中にしかその生の軌跡を描くことができない以上、作品には個體とともに時代の影もつきまといっている。文學作品は、どのような情況下にあっても、情況に還元されるものと作者個人に還元されるものとの交錯した構造として現われるが故に、情況に還元される意味では情況の結果を表現し、作者個人に還元される意味では創造内部での追求の高さの程度を擔うのである。『紅樓夢』は反映了中國封建社會末期的百科全書⁽⁴⁶⁾と言いつつ、そこに描き出された人間像は、單に特定の時代の特定の階級の氣運を理解させるだけの「歷史上のドキュメント」としてしか機能し得ないのではないだろうか？

一個作家、不管他具有多麼大的才能、如果他的筆是爲已經衰頹的社會力量服務、其作品終究是會被遺忘的。也就是說、對於一個作家、使他能够在歷史上留下一定的影響的關鍵不是在于才能、而是在于這種才能具有什麼樣的階級的・思想的傾向、是否和歷史前進的方向一致。這是分析評論古代作家和古典文學作品的根本出發點。這就是文學的人民性問題。⁽⁴⁷⁾

ある作家が、どんなに大きな才能をそなえていようとも、もし彼の筆がすでに衰退した社會勢力のために服務するなら、その作品は結局の所きつと忘れ去られるものである。これはとりもなおさず、ある一人の作家に對し、彼に歷史上一定の影響力を留めさせ得る鍵は、才能にあるのではなく、そうした才能がどんな階級的的思想的傾向をそなえているか、歴史の前進する方向と一致しているかどうかに在るということを意味する。これは古い時代の作家と古典文學作品を分析評論する根本的出發點であり、これこそが文學の人民性の問題なのである。

右の見解は、人民の立場に立つことは文學のより高い價值を約束することだと思ひ込んだ淺薄な文學觀以外の何物でもない。何を信じようと、文學はその作家の自己表現力以上のものも以外のものも生み出しはしないのである。然しながら、『紅樓夢』及び曹雪芹がそうした淺薄な文學觀で斬られた擧句に、

《紅樓夢》是公認的中國古典文學現實主義的傑出作品、其作者曹雪芹是有資格排在人民作家之列的。⁽⁴⁸⁾

「紅樓夢」はおおよけに認められた中國古典文學の現實主義の傑作で、その作者曹雪芹は人民作家の列に居並ぶ資格をもつ人物である。

という評價を與えられたのは事實である。曹雪芹の世界觀なるものを、『初歩民主主義思想』（進歩思想）と『貴族地主階級思想』（落後思想）とに二分し、作品の内容や登場人物をそれに従って振り分けた上で稱賛したり非難を加えたりするやり方が、『紅樓夢』藝術形象的整體をとらえ損っていることは明確に指摘する必要があるかと思われる。

この論文では、作者曹雪芹にとって、また主人公賈寶玉にとって無くてはならぬ存在、林黛玉を取り上げて、『紅樓夢』のもつ本當の重みに能う限り迫ってみたい。

III

觀念上の轉倒によって成立した『紅樓夢』の自由世界は、轉倒が現實を踏まえてのことであり、究極的には現實に降り立たざるを得ない以上、時間の経過とともに再轉倒の危

林黛玉論（小濱）

機に曝される。内容的に見れば、少女達は生長することによって、否應なくガッチリと社會組織の枠内へ組み込まれていくのである。

奇怪、奇怪！怎麼這些人只一嫁了漢子、染了男人的氣味、就這樣混帳起來！比男人更可殺了！（第七十七回）

不思議だ、不思議だ！ どうしてあの連中はいったん男に嫁いで、男のニオイに染まっただけで、あんなにろくでなしになり始めるのか！ 男よりもっとひどくなっちゃうんだから！

という賈寶玉の嘆息は、『大觀園』の少女達だとて知らず／＼のうちに敗れ去り、順應させられてしまう禮教規範の強力さを物語っている。日常的な解體——痛みを感じない變質は、少女達にとって最も恐るべき事柄と言えるのではないだろうか？

尤氏道：「誰都像你真是一片無罣礙、只知道和姊妹們頑笑、餓了吃、困了睡、再過幾年不過還是這樣、一點後事也不慮。」寶玉道：「我能殼和姊妹們過一日是一日、死了就完了、什麼後事不後事。」李紈等都笑道、「這可又是

胡說！就算你是個沒出息的、終老在這裏、難道也姊妹們都不出門的？」尤氏笑道：「怨不得人都說他是假長了一個胎子、究竟是個又傻又蠢的。」寶玉笑道：「人事莫定、知道誰死誰活。倘或我在今日明日、今年明年死了、也算遂心一輩子了。」衆人不等說完、便說：「可是又瘋了、別和他說話纔好。若和他說話、不是蠢話、就是瘋話。」喜鸞因笑道：「二哥哥、你別這樣說、等這裏姐姐們果然都出了門、橫豎老太太太寂寞、我來和你作伴兒。」李紈尤氏等都笑道：「姑娘也別說蠢話。難道你是不出門的？這話哄誰！」說的喜鸞低了頭。（第七十一回）

尤氏は言いました：「あなたのようにこれっぽっちも氣にかかることもなく、姉妹達とふざけて腹ペコになったら食べる、眠たくなったら眠ることしか知らないといった人もいませんことよ。この先もう何年かたっても相變らずこの調子で、將來の事なんてちっとも考えないのでしょねえ。」寶玉は言いました：「わたしは姉妹達と一日を過ごせるのが生きがいです、死んでしまえばそれまで、何の將來の事がありますしう。」李紈らは皆笑いながら、「これはまたデタラメなノ

たとえあなたがものにならずに此處で年寄ったとしてもですよ、まさか姉妹達まで皆お嫁に行かぬままなんてことがありまして？」尤氏が笑いながら、「なりばかり大きくなった赤んぼさと誰が言うのも無理ないわね、はてさてお馬鹿さんにも、ひとつ輪がかかっているんだもの。」寶玉は笑いながら、「浮き世は定めなし、いったい誰が死に誰が生き残るやら。もしわたしが今日明日、今年か來年かのうちに死んでしまったとしたら、きっとそれは満足な一生ということになるでしょうよ。」皆は最後まで言わせず、「またもや氣狂い病におなりだわ、この人とはもうお話しちゃダメ。話してごらんさないな、馬鹿話でなきや氣狂い話なんですから。」すると喜鸞が笑いながら、「二のお兄さま、そんな風におっしゃらないで。こちらのお姉様方がみなさんほんとにお嫁に行っておしまいになってからは、どのみち御後室様も奥方様もお寂しいことでしょうし、わたくしが参ってあなたのお相手をつとめますわ。」李紈や尤氏らは皆笑いながら、「あなたも馬鹿なこと言っちゃダメ。まさかあなたはお嫁に行かないとでも？ 誰が騙されるのですか？」言われて喜鸞はさしうつむきます。

《大觀園》の原像を常に自分の世界として戀慕う寶

玉——彼の吐露する感情は、當の少女達自身の氣づかない彼女達の解體に對する悲しみと苛立ちに包まれている。例え

早知道都是要去的、我就不該弄了來。臨了剩我一個孤鬼兒。（第十九回）

皆行つてしまふのだと早くからわかつていたら、來てもらうのではなかつたよ。最後にはわたしをひとりぼっちにしてしまふんだらう。

という、滿面涙の痕を見せてふて、寢した幼い嘆きは、遂に忽又想到去了司棋、入畫、芳官等五個；死了晴雯；今又去了寶釵等一處；迎春雖尚未去、然連日也不見回來、且接連有媒人來求親：大約園中之人不久都要散的了。縱生煩惱、也無濟於事。不如還找黛玉去、相伴一時、回來還是和襲人廝混。只這兩三個人、只怕還是同死同歸的。

（第七十八回）

ふとまた思ふのでした：司棋・入畫・芳官ら五人には行かれた；晴雯には死なれた；今また寶釵さんの所に出て行かれた；迎春姉さんにはまだ出て行かれぬとは言ふものの連日お

林 黛玉 論（小濱）

戻りにならないし、その上引きも切らず仲人がやって來て縁談を持ち込む始末。これではおよそ園内の人々は遠からず散り散りになつてしまふだらう。たとえ思い悩んでみた所で何にもなるまいよ。ここはやっぱり黛玉さんを訪ねて暫くお相手し、戻つたら戻つたで襲人とふざけあうに越したことはない。この二三人だけは多分死ぬるも一緒だらうしな。

という、最早如何ともし難い現實に對する暗い認識に變つていくのである。

「少女」の世界に融け込もうとしながら、『泥作的骨肉』たる男子としての自分の異質さをどうしても認めざるを得ない寶釵の痛みは、轉じて、少女達が現實の禮教規範の中に絡め取られていく情況に對し、最も敏感な反應を示したと言える。例えば、薛寶釵や史湘雲が彼に「立身出世」「經世濟民」なるものを志すように勧めた時、彼は耐え難い苦痛を抱くのであるが、彼女達のそうした言動には確かに、彼女達自身のみならず、「少女世界」《大觀園》全體の解體していく姿が、極く自然な形で表現されている。ところが、こうした薛寶釵に對して

薛寶釵是科舉制度熱烈的支持者、封建禮教的虔誠信徒。

這個形象的實質、就在于她是一個封建制度的堅決維護者。

薛寶釵是科舉制度的熱烈な支持者、封建禮教の忠實な信徒である。この形象の實質は、彼女が封建制度の斷固たる擁護者であるという所に在る。

という性急な決めつけが行われる。右の見解は薛寶釵のもつ重みを全く理解しないものである。自らの強いられた情況に對して、擁護であれ反抗であれ、緊張狀態としての意識的な關わり合いを保持することが人間の日常性であるなら、反抗する立場の人間が壓倒的に多い筈の現實の社會に於いて、どうして「革命」なるものが迅速に進行しないのだろうか？ わたしたちは、『封建制度的堅決維護者』として斬り捨てられる薛寶釵が

男人們讀書明理、輔國治民、這便好了；只是如今並不聽見有這樣的人、讀了書、倒更壞了。（第四十二回）

男の方々は書物を読んで道理を明らかにし、國を輔け民を治める、それでよいのです。けれども今時そんな方がいらつしやるなんて聞いたこともありませんわ。それどころか書

物を読んで、逆に一層悪くおなりです。

と洩らしながらも、「良妻賢母」の道を歩む姿を輕々しく見過ごしてはならない。なぜなら、現實を無理なく受け入れていくという精神的な平板さは、情況がどのように變化しようとも、それに關わりなく適用するという動かし難い利點をもっているのだから。そうした精神的平板さに備わる「強靱さ」とでも言うべきもの——曹雪芹が薛寶釵に賦與した重みとは、正しくこの點に存在したのである。

さて、そうした薛寶釵等の重みを十分に辨えかつ描寫しながらも、曹雪芹が最も力を奮って創造した少女はやはり林黛玉であろう。釵黛は對立形象であると頻りに言われるが、たとえそうであるとしても、封建體制の擁護者とそれへの叛逆者として對立的なのではない。一方が何物にも突き破られぬ生活者の重みを表現し、他方が生活（現實）というものをどうしても越えてしまふ人間の幻想を擔う所以で、そうも言い得るに過ぎない。生活者の重みを體現する薛寶釵の現實的などつしりとした安定感と、どうしても現實から浮き上がってしまう林黛玉の動搖の見える鋭さとは、或

いは静と動として、或いは緩と急として作品中に織り込まれている。こうした「像」的な問題に關しては第五章で改めて論じたい。

日常的な解體を遂げていく《大觀園》に在って、その解體現象に同化し得ないままに存在し続けることは正しく至難の技である。林黛玉は絶えざる緊張状態の中でそれを擔わなければならなかった。

日日只在園中遊臥、不過每日一清早到賈母王夫人處走走就回來了、卻每每甘心爲諸丫鬟充役、竟也得十分閒消日月。或加寶釵輩有時見機導勸、反生起氣來、只說：「好的一個清淨潔白女兒、也學的沽名釣譽、入了國賊祿鬼之流。這總是前人無故生事、立言豎辭、原爲導後世的鬚眉濁物。不想我生不幸、亦且瓊閣繡閣中亦染此風、眞眞有負天地鍾靈毓秀之德。」因此禍延古人、除四書外、竟將別的書焚了。衆人見他如此瘋顛、也都不向他說這些正經話了。獨有林黛玉自幼不曾勸他去立身揚名等話、所以深敬黛玉。（第三十六回）

〔賈寶玉は〕毎日ただもう園内で遊び憩い、毎朝いつも後室

林黛玉論（小濱）

と王夫人の所に顔を出して戻って来るだけ、いつでもハイハイと侍女達のために仕事を引き受け、それでまあ十分のんびりと月日を過ごしています。寶釵などが時折り機を見て諫言しようものなら、却って腹を立て、こう言いつのるばかり。

「よくもむざむざと清淨潔白な女兒が、名譽を騙り取ることを選び、國賊・祿盜人の仲間入りをしようとは。こうしたことはすべて昔の人間が理由もないのに騒ぎ立て、あれこれ言い散らしたこと、それとてもと後世のむくつけき男どもを導くためであつた筈。思いもかけずわたしは不幸な身に生まれるし、その上閨閣中の女兒達すらこうした空氣に染まるなんて、まったくもって靈秀を集め育まれた天地の德に負くというもの。」従つて禍いは古人にも及び、四書以外の書物は皆燃やされる始末。彼のこんな氣狂いぶりを見せつけられては、彼に對して誰一人そうした眞面目な話をしなくなりました。ただ一人林黛玉だけは小さい頃から身を立て名を揚げなどと勧めた例がなく、そこで寶玉も深く敬意を拂っているのです。

このように、その度毎に賈寶玉に食つてかかられながらも、誰もが日常的な地滑り現象を見せて情況に順應してい

く時、林黛玉は、唯一人言わば「取り残される」格好になり、「叛逆」或いはそれを裏返した「孤立無援」といった劇的な言葉に酔い痴れる餘裕もないままに、日々の生活の中での存在の不安に浸潤されざるを得ない。

你是個明白人、何必作此形象自苦。我也和你一樣、我就不似你這樣心窄。何況你又多病、還不自己保養。

(第七十六回)

あなたはもののわかったお方、なにもそんな風にして自分から苦しむことはないでしょ。わたくしとてあなたと同じ身の上ですけれど、あなたのように量見は狭くありませんわ。いわんやあなたはまた病氣がちのお身體、御自分から養生にとめなくっちゃ。

と史湘雲が快活に慰め、聯句を卷こうと誘えば、林黛玉は《不肯負他的豪興》なのだが、史湘雲の慰めからどうしてものはみ出してしまふ心情を隠し切れず、結局

冷月葬花魂……詩固新奇、只是太頹喪了些。你現病着、不該作此過於淒清奇諷之語。

冷月花魂ヲ葬ル……詩はもとより新奇ですが、ちょっと頹廢

に過ぎるくらいがあります。あなたは現に御病氣でいらっしやるし、こうした餘りにももの寂しくてふつうと違った句を作るべきではありませんわ。

と史湘雲を嘆かせてしまふ。

おそらく林黛玉の思いは常に孤立へ／＼と向かっている。彼女には、餘儀なくされた現實の人間關係が剥げ落ち、高一個の人間という相對性が消滅していく中に立ち現われる自分というものが見えているのである。

人有聚就有散。聚時歡喜、到散時豈不清冷；既清冷則生傷感；所以不如倒是不聚的好。比如那花開時令人愛慕、謝時則增惆悵；所以倒是不開的好。(第三十一回)

逢うは別れの始。逢う時嬉しければ、別れる時まさか寂しくないことがあろうか。寂しければ感傷的にもなってしまう。だから逢わないに越したことはないわ。例えば花は咲いた時人から慕われるから、散る時になればいっそうがっかりする。だから初めから咲かない方が却ていいのだわ。

という彼女の言葉は、日常的な聚散の生み出す強いられた人間關係を越えた自分を獲得したいという願望を表現して

いる。もちろん、そうした願いはすんなりと叶うべくもない。むしろ他者との關係を強いられ、その中で相對性に曝される自分が、決して内心の幻想の飛躍によって救済されはしないことを知らされる日々が続いていくに相違ない。貧窮のうちに創作活動に取り組んだ曹雪芹は、身を以てそのことを承知していたと思う。そしてその實感^{じつかん}は、母やがて父をも亡くし、客人^{かきうど}として買家に寄宿するという現實の人間關係に於ける弱小さと、生來の「孤傲」な性格とを同時に擔った林黛玉に於いて最も強く表現されたのではないだろうか？

紫鵲雪雁素日知道林黛玉的情性、無事悶坐、不是愁眉、便是長歎、且好端端的不知爲什麼常常的便自淚道不乾的。先時還有人解勸、或怕他思父母、想家鄉、受了委屈、只得用話寬慰解勸。誰知後來一年一月的竟常常如此、把這個樣兒看慣、也都不理論了。所以也沒人去理、由他去悶坐、只管睡覺去了。（第二十七回）

紫鵲や雪雁は日頃から林黛玉の氣性を心得ています。何事もなくてふさいで坐っている時、眉をひそめているのでなければ

林黛玉論（小濱）

ば長いタメ息、その上わけもないのにどうしたことかいつも涙流れて乾く間もなし。最初のうちはまだ慰めようとする人もあって、父母を思うのか、故郷を思うのか、つらい目に遭ったのかと、やむなく言葉をつくして慰めておりました。ところが一月一年たっても相變らずこの有様ですので、すっかり見慣れてしまつて誰もとやかくいわなくなりました。だからまた誰一人かまう者として無く、彼女がふさいで坐っているのにまかせて、知らん顔して寝てしまいました。

絶えず襲つて來る言い知れぬ不安に涙しつつ、林黛玉は餘人の預り知らぬ世界を無言のうちに耐えていく。然しながら、奥深くしまひ込まれた感情も、時として言葉となつて口を衝いた。そしてこの時、《都云作者癡、誰解其中味》という曹雪芹自身の訴えが改めて甦つて來るように思われる。つまり、曹雪芹と林黛玉が、作者と作中人物という境界を越えて相互に浸透し、一體化の様相を呈するのである。例えば《葬花吟》（第二十七回）——散り行く花に心を傷め、せめてこれを手ずから葬らんとし、その潔き身を慕いつつ我身を顧みて、遂に《花落ち人亡び兩つながら知らざらん》

と結んだ思い——中の《儂^{われ}今花を葬らば人癡と笑はん、他年儂を葬るは知んぬ是れ誰ぞ》という句に、前述の曹雪芹の訴えが重なり合った時、哀吟する林黛玉の緊張感の背後からは、「書く」という行爲を支える曹雪芹の緊張感が浮かび上がってくる。そしてその故に、《埋香塚にて飛燕殘紅に泣く》⁽²⁾は作品中の一情景に止まることなく、作品全體を掩う程の重みを持つに至るのである。

曹雪芹の《十年辛苦》は、情況に手固く順應し、あるがままの現實をすんなり受け入れていく人々にとっては、確かに《癡》⁽³⁾としか思われない作業であつたと言えよう。然しながら、彼の生の軌跡は、正しくこの《癡》への執着として描きつくされたのである。そして《葬花吟》を詠じた林黛玉こそが、こうした曹雪芹を擔い得たと言つてよい。

換言すれば、《大觀園》の日常的解體に順應し得ない林黛玉が詠じた《葬花吟》は、自らの強いられた情況の中で解體しないという共通性を媒介として、曹雪芹自身が實際に強いられた情況に對する彼の意識をも反映しているのである。

林黛玉悲劇性格陰沈の一面正反映着封建制度所加給婦女の沈重的壓力。聽聽這個孤傲靈魂的心聲吧：「一年三百六十日、風刀霜劍嚴相逼。明媚鮮妍能幾時、一朝飄泊難尋覓。」一個本來適宜于攝取生活中一切美麗的東西的人却生活在卑污的環境裏。你能讓她唱出什麼樣的聲音呢？她那悲涼的聲音正是對封建禮教的憤怒的抗議、象是發自荒涼的山谷中的求救的聲音、聲音雖微、並不失其要掙扎出險境的力量。人們從林黛玉陰冷的性格裏不只是受到消極的悲傷的感染、而且激發起對造成她悲劇性格的封建禮教的強烈憎恨。何況從林黛玉的悲劇性格裏發出的并不只是悲涼的聲音、她還有其叛逆性格的一面。她的思想和行動都是和封建貴族大家閨範的要求背道而馳的、這使她和卑污的環境日益乖離。⁽⁴⁾

林黛玉の悲劇的性格の陰鬱な一面は正しく封建制度が女性に加えた重壓を反映している。この孤傲のたましいの聲を聞け：「一年三百六十日、風刀霜劍嚴シク相逼ル、明媚鮮妍モ能ク幾時ゾ、一朝飄泊スレバ尋ネ覓メ難シ。」本來生活中の一切の美しいものを取り入れるにふさわしい人物が却つて低劣な

環境の中で生活している。彼女にどんな聲で歌わせることができようか？ 彼女のあの悲し気な聲は正しく封建禮教に對する怒りをこめた抗議であり、荒涼たる山谷から發せられた救いを求める聲のようである。その聲は微かだけれど、危険な境地から何とかして抜け出ようとする力を失っていない。人々は林黛玉の暗くひややかな性格から消極的な感傷の感化を受けるだけでなく、彼女の悲劇性格を造り上げた封建禮教に對する強い憎惡の念をも奮い起こす。ましてや林黛玉の悲劇性格から發するものは悲し氣な聲だけではない、彼女は叛逆性格の一面も保有しているのである。彼女の思想と行動はみな封建大貴族の婦徳の要求と方向を異にするものであって、このことが彼女を低劣な環境から日ましに乖離させたのである。

右の評論で不満を感じるのは、封建禮教とぶつかる林黛玉が「叛逆者」として餘りに伸びやか過ぎることである。おそらくそれは、《叛逆性格》が《悲涼的聲音》と全く切り離された形で過剰に強調される傾向に由る。《叛逆性格》と《悲涼的聲音》の不斷の相互作用がもたらす緊張の中で

林黛玉論（小濱）

日々の生活を営む林黛玉は、《中國封建社會末期》という情況の下、《字字看來れば都是^なれ血、十年の辛苦尋常ならず》なる苦闘に耐え抜いた曹雪芹を、一體いかなる意味で擁っているのか？ 《叛逆性格》をこそ、林黛玉自身に於いて評價できる點とみなすこの評論の機械論的單純さは、こうした問いに答えることができない。

薛寶釵を「擁護者」と決めつけるならば、林黛玉は容易に「叛逆者」の地位を獲得し、薛寶釵と全く切り離された地點に立って、彼女と對立することになるだろう。然しながら、既に述べたように、薛寶釵は自らの強いられた情況に對して、「擁護」とか「叛逆」とかいった積極的な意識をもって關わっているのではない。あるがままの現實を無理なく受け入れていくだけである。そしてそうした薛寶釵的な人間が、曹雪芹の周圍にもいくらでも實在していたことも確かである。

一方、林黛玉は、曹雪芹が「書く」ことによって初めて存在し、更にまた、「書く」ことによってもたらされる曹雪芹自身の日常性からの異質化をも、薛寶釵との對照の下

で象徵している。そして曹雪芹は、「書き」續けることによって林黛玉の抱く孤立感・緊張感と同質の感情に苛まれながらも、強いられた情況——「封建」體制を通じて封建「體制」に挑み、《紅樓夢》という、情況の轉變に耐え抜く不朽の作品を生み出したのであった。

IV

林黛玉を論じるにあたつて絶対見落とせないのが、彼女と賈寶玉との關係である。

寶玉和黛玉二人之親密友愛處、亦自較別個不同、日則同行同坐、夜則同息同止、眞是言和意順、略無參商。

(第五回)

寶玉と黛玉兩人の仲の良さは、またおのずからほかとは一緒にならず、晝は何をするのも二人揃つてだし、夜は夜であちらが寝ればこちらも寝むといった具合で、まことに意氣投合して仲違いなどまずありません。

と述べられた二人のふれあい、回を重ねるにつれて次第に子供っぽさを失い、相手に對して投げかける言葉にすら

迷つてしまふという感情の奥深さをもつようになる。

黛玉還有話說、又不曾出口、出了一回神、便說道：「你去罷。」寶玉也覺心裏有許多話、只是口裏不知要說什麼、想了一想、也笑道：「明日再說罷。」(第五十二回)

黛玉はまだ言いたいことがあるながら、それが言葉にならず、しばらくポカンとしていた舉句に「あなた、お行きなさいな。」と言いました。寶玉も心の中では色々話があるように感じながら、口に出すとなると何と言つたらいいのかわかりません。ちよつと考えた末、笑いながら「じゃあまた明日にしましょう。」と言いました。

寶玉笑道：「妹妹臉上現有淚痕、如何還哄我呢。只是我想妹妹素日本來多病、凡事當各自寬解、不可過作無益之悲。若作踐壞了身子、使我——」說到這裏、覺得以下的话有些難說、連忙嚥住。只因他雖說和黛玉一處長大、情投意合、又願同生死、卻只是心中領會、從來未曾當面說出；況兼黛玉心多、每每說話造次、得罪了他。今日原爲的是來勸解、不想把話又說造次了、接不下去、心中一急、又怕黛玉惱他。又想一想自己的心實在的是爲好、因而轉

念爲悲、已早滾下淚來。黛玉起先原惱寶玉說話不論輕重、如今見此光景、心有所感、本來素嘗愛哭、此時亦不免無言對泣。(第六十四回)

寶玉は笑いながら言いました：「黛玉さんのお顔には現に涙のあとがおりなのに、どうやってまだわたしをだますおつもり？ わたしはただこう思うのです、黛玉さんはもとと日頃から御病氣がちなのですから、何事につけても氣を大きく持って、つまらぬ悲しみをなさり過ぎないようにとね。もしお身體をそこなったりなさったら、このわたしを……」とここまで言い終ると、その先を續け難く感じ、あわてて聲を呑み込みます。これもただ、彼が黛玉とともに大きくなり、意氣投合し、まだどうか生きるも死ぬも一緒といつても、心の中で了解しているだけで、これまで面と向かって切り出したことはないからです。まして黛玉はあれこれと氣をまわす性質、いつもうっかり話をしては彼女の機嫌を損ねています。今日とてもとてもとは慰めにやって來たのに、またもやうっかり口をすべらせて、後が續かずに内心うろたえ、それにまたまた黛玉の機嫌を損ねるのではないかと心配になります。加えて自分としては黛玉にとってよかれかしと思っていればこそな

林黛玉論（小濱）

のだと考えもし、そんなわけで急に悲しくなってきた、早くも涙はポロポロとこぼれ落ちます。黛玉も初めのうちは寶玉が事の輕重も辨えずに喋ることに腹を立てましたが、今この有様を目にすると、心中感ずる所があり、もともと淚脆い性格でもありますから、今回もまた言葉なく向かい合って泣けて來るのです。

寶玉との間の様々な出來事ほど林黛玉の心を搖さぶつたものはない。自分の存在が或る人間に集中的に依りかかる時、相手のもつ重みは異常なまでに擴大し、その片言隻句一舉一動に執着せざるを得ない。人々からは早々と「黛玉はひとり高くおさまって、下々の人間のことなど眼中になし」(第五回)とみなされ、自らも常に《おぼさまの所はわが家も同然とはいえ、結局は寄宿先なのだ》(第二十六回)というひげ目を抱いて引き返ってしまふ林黛玉は、そうした激しい想いを寶玉に寄せ續けたのであった。

那林黛玉本不曾哭、聽見寶玉來、由不得傷了心、止不住滾下淚來。寶玉笑着、走近牀來道：「妹妹身上可大好了？」林黛玉只顧拭淚、並不答應。寶玉因便挨在牀沿上坐

了、一面笑道：「我知道妹妹不惱我、但只是我不來、叫旁人看着、倒像是咱們又拌了嘴似的。若等他們來勸咱們、那時節豈不咱們倒覺生分了。不如這會子、你要打要罵、憑着你怎麼樣、千萬別不理我。」說着、又把好妹妹叫了幾萬聲。林黛玉心裏原是再不理寶玉的、這會子見寶玉說別叫人知道他們拌了嘴就生分了似的這一句話、又可見得比人原親近、因又掌不住哭道……（第三十回）

林黛玉はもともと泣いてはいなかったのですが、寶玉の來訪を聞くと、思わず悲しくなつて、とめどなく涙が溢れてきたのでした。寶玉は笑いながら寢臺に歩み寄つて「黛玉さん、お加減はもうだいぶよろしいの?」と言いましたが、林黛玉は涙を拭うばかりで返事をしません。寶玉はそこで寢臺の縁へ腰掛けて笑いながら言いました。「わかつてるんですよ、黛玉さんがわたしのこと怒つてらっしゃらないのは。ただわたしがこちらへ參らぬとなると、周圍の人達にはわたしたちがまた仲違いしたみたいに見えるでしょう。もしあの人達がやいのやいのと取り持ちをしに來てからということになりますと、わたしたちは却つて水くさくなりはいらないでしょうか? そ

れよりも今、打つなり罵るなり、あなたの好きなようになさつて下さい。わたしを構いつけないのだけはどうか勘忍して。」そう言つて、またも「ねっ黛玉さん」の繰り返しです。

林黛玉は心の中ではもともと二度と寶玉に構わないつもりでしたが、今寶玉が、他の人達に二人が仲違いしたことを知られて水くさくなつてしまうことのないようにしようといつた様な話をするのを聞くと、してみれば自分達はもともと他人よりも親しい仲だったのだわと思ひ當たり、そこでこらえ切らずにまた泣き出して言いました……

お互いが生身の自分をぶつけ合う——それなりに完結した一個の生命體として各々自存し、かつまたお互いにそれを理解した上で相手を求めて已まないものである。

ところでこうした林黛玉と賈寶玉は周圍の人々からは「癡情の人」としてとらえられていた。

那林黛玉正自傷感、忽聽山坡上也有悲聲、心下想道：

「人人都笑我有些癡病、難道還有一個癡子不成?」想着擡頭一看、見是寶玉。（第二十八回）

黛玉が感傷に沈んでいる折も折、突然斜面の上でも悲し氣な

聲がするのが聞こえたものですから、心中「皆わたしのことを馬鹿氣た病氣の持主だと笑うけれど、まさかもう一人お馬鹿さんがいるなんて。」と思いつつ、頭を上げて見てみれば、なんとこれが寶玉。

「癡情の人」としてとらえられるということは、周囲の目から見れば、二人の間柄は「一風變つた似た者同士、よく氣が合う」程度に過ぎないことを示している。そしてそのことは、林黛玉と賈寶玉の關係が「婚姻」についての決定的要因となり得る程の現實的な力強さをもつものとして理解されなかつたこと、更にまた、そうであればこそ、何物にもとらわれないぶつかり合いを許されたことをも説明してくれる。

もちろん、事態は微妙な變化を遂げていく。第二十九回で所謂《金玉縁》をめぐって天地もひっくり返らんばかりの大騒動を繰り廣げた後、二人の間にはそれほど表立つた騒ぎは起こらない。然しながら、かの大騒動の時の二人の内心の動きを知らぬ人々をよそに、或いは二人の間で、或いはそれぞれの心の中で、現實的には「婚姻」を終着點

林黛玉論（小濱）

とする想いの深まりが見られる。

不想剛走來、正聽見史湘雲說經濟事；寶玉又說：「林妹妹不說這樣混帳話、若說這話、我也和他生分了。」林黛玉聽了這話、不覺又喜又驚、又悲又歎。所喜者：果然自己眼力不錯、素日認他是個知己、果然是個知己。所驚者：他在人前、一片私心稱揚於我、其親熱厚密竟不避嫌疑。所歎者：你既爲我之知己、自然我亦可爲你之知己矣；既你我爲知己、則又何必有金玉之論哉；既有金玉之論、亦該你我有之、則又何必來一寶釵哉！所悲者：父母早逝、雖有銘心刻骨之言、無人爲我主張；況近日每覺神思恍惚、病已漸成、醫者更云：「氣弱血虧、恐致勞怯之症。」你我難爲知己、但恐自不能久待；你縱爲我知己、奈我薄命何。想到此間、不禁滾下淚來。待要進去相見、自覺無味、便一面拭淚、一面抽身回去了。（第三十二回）

はからずも、やって來た時丁度聞こえたのが史湘雲の經世濟民の話、おまけに寶玉の方はこう言うのでした：「黛玉さんはそんなつまらぬ話なんかなさらぬさ。もしそんなことおっしゃったら、あの方とも仲違いしたに決まってる。」これを聞いて

た黛玉は、思わず喜びもし驚きもし、悲しみもし嘆きもしたのでした。喜んだのは——やっぱりわたしの目に狂いはなかった、日頃からあの方こそわたしの知己と認めていたのだけれど、やっぱりそうだったわ。驚いたのは——人前なんて氣にもなさらず、思いの丈をつくしてわたしを讀めてくださった、その親密な情たるや他人の思惑など何處吹く風。嘆いたのは——あなたがわたしの知己だとすれば、當然わたしもまたあなたの知己の筈。二人が互いに知己だとなれば、どうして金玉を取り沙汰することがありましよう。また金玉を取り沙汰するからには、その時は當然あなたとわたしがその縁をもつべき筈なのに、どうしてまた寶釵なる人が現われたりなんかするのでしょう。悲しんだのは——兩親はとくに亡くなり、心に深く刻み込んだ言葉はあっても、わたしの後立てになつてくれる人はない。まして近頃はいつも精神がもう一つしっかりせず、病氣ははや次第に本物になつてきている感じ。お醫者様も「氣の働きが弱く血行不順で、癆瘵になるかも知れぬ。」とおっしゃった。二人は知己とは言うものの、わたしの方は長くもたないのではあるまいか。たとえあなたがわたしの知己だとしても、わたしの薄命を何としましょう。こ

こまで考え及ぶと、どうしようもなく涙がこぼれ落ちます。こうなってみると、中へ入って會うのも味氣なく思われ、そこで涙を拭いっつ、身を翻して戻って行くのでした。

この林黛玉を見つけた賈寶玉は追いつがる。そして讀者の心が、その度毎に話し手の心に重なり合わざるを得ないような二人の會話が展開されるのであった。

寶玉睨了半天、方說道「你放心」三個字。林黛玉聽了。怔了半天、方說道：「我有什麼不放心的？我不明白這話。你倒說說、怎麼放心不放心？」寶玉歎了一口氣、問道：「你果不明白這話？難道我素日在你身上的心都用錯了？連你的意思若體貼不着、就難怪你天天爲我生氣了。」林黛玉道：「果然我不明白放心不放心的話。」寶玉點頭歎道：「好妹妹、你別哄我。果然不明白這話、不但我素日之意白用了、且連你素日待我之意也都辜負了。你皆因總是不放心的緣故、纔弄了一身病。但凡寬慰些、這病也不得一日重似一日。」林黛玉聽了這話、如轟雷掣電、細細思之、竟比自己肺腑中掏出來的還覺懇切、竟有萬句言語滿心要說、只是半個字也不能吐、卻怔怔的望着他。此時

寶玉心中也有萬句言詞、一時不知從那一句上說起、卻也怔怔的望着黛玉。兩個人怔了半天。

寶玉は暫く見つめていてようやく「安心なさって」とポツリ。

これを聞いた林黛玉、暫くポカンとしていましたがようやく「わたしに何か安心できないことがあるとでも？　わかりませんわ。おっしゃって下さいな、どうして安心だの安心でないだのと？」寶玉はフウツとため息をついて尋ねます、「ほんとに今の話おわかりにならないの？　まさか日頃あなたに寄せていたわたしの想いがみな無駄だったなんてことが？

あなたのお氣持さえちゃんと酌み取れなかった以上、あなたが毎日わたしのことでお腹立ちになったのも無理のない話ですわね。」林黛玉は「だってほんとにわかりませんの、安心だの安心でないだのというお話。」寶玉はうなずいてため息まじりにこう言いました：「ねえ黛玉さん、わたしを騙さないで。ほんとにこの話がおわかりにならないとしたら、わたしの日頃の心遣いが無駄になるだけでなく、わたしに對するあなたの日頃のおこころざしにもそむいてしまうことになるのですよ。いつも安心できないから、あなたは御病氣になられたのです。もう少し御氣持をゆったりなさったら、御病氣も

林黛玉論（小濱）

日一日と重ることもなかったでしょうに。」林黛玉はこれを聞くと、バツと雷に打たれたかの様、仔細に考えてみると、自分の胸の中からすくい出したものよりもっと沁々と感じられ、言いたいことは山ほどありながら、それが少しも聲にならず、ポカンとして寶玉を眺めやっている始末。この時寶玉の方も心中に積もる思いがありながら、しばらくはどう切り出したらいいいのかわからず、これまた呆然と黛玉を見つめるばかり。二人は暫く呆然としたままでした。

呆然と立ちつくす二人は、時間性を喪失した緊迫した靜止體として讀者の心に強く刻み込まれる。暫くして林黛玉は、賈寶玉が止めるのも聞かず、《何のおっしゃることがございまして。あなたのお話、わたくしにはとうにわかっております。》と言いつ残して去り、入れ代わりに忘れた扇子を届けるために襲人がやって来る。ところが、まだボンヤリと氣抜けしたままその場に居た賈寶玉は、

並未看出是何人來、便一把拉住、說道：「好妹妹、我的這心事、從來也不敢說、今兒我大膽說出來、死也甘心。我爲你也弄了一身的病在這裏、又不敢告訴人、只好掩着。

只等你的病好了，只怕我的病纔得好呢。睡裏夢裏也忘不了你。」

誰とも見定めずに、ギョッと引き寄せて言いました。「ねえ黛玉さん、わたしのこの想い、今まではどうしても打ち明けれなかったのですけれど、今日は思い切って打ち明けたもう死んでもいい。わたしもあなたのために病氣に罹っているのですが、他人にはどうしたって言うもならず、そっくり胸のうちにしまい込んでいるばかり。あなたの御病氣が良くなつてこそ、はじめてわたしの病氣も癒るのです。寝ても覺めてもあなたを忘れられないですよ。」

この時の襲人のうろたえようは尋常ではない。「一風變つた似た者同士」の親密さとして、言わば微笑ましく見られてきた關係が現實性をもとうとしているのである。そのこと自體は確かに自然の成り行きと言えよう。然しながら、「癡情の人」ととらえられる中で保證されてきた「安全性」は、現實性の獲得という動きを見せたその瞬間から失われる。二人の關係がそのままの形で現實の秩序の枠内へ勝手に滑り込もうとすれば、それは必ずや《不才之事》として

叩きつぶされるに相違ない。襲人の驚きは正しくそうした結末を示唆するものであった。

それでもまだ大部分の人々は「癡情の人」として二人をとらえ、その關係の現實性などまともに考えていない。前八十回を読む限り概ねそのようである。薛姨媽が林黛玉と賈寶玉の縁談を口に出しはする（第五十七回）けれども、まだまだ現實味には乏しいし、いずれは縁組みするだろうという下男の話（第六十六回）もそれ以上のものではない。八十回以降、林黛玉と賈寶玉の關係が、明らかに周囲の情況と激しく絡み合う中で、三十回前後に見られる緊迫した精神狀態を再現するのは疑い得ないだろうが、曹雪芹はそれをどのような筆さばきで處理しようと考えていたのか……。具體的に文章として残らなかったのは實に惜しまれるならない。ともあれ、林黛玉と賈寶玉の關係は第三十二回以降も強まりを見せる。「癡情の人」としてとらえられる中、現實性を求めて……。

第三十三回で賈寶玉は父賈政から大いに笞打たれる——
《不肖種種大いに笞撻を承く》。

忽又覺有人推他，恍恍惚惚，聽得有人悲泣之聲。寶玉從夢中驚醒，睜眼一看，不是別人，卻是林黛玉。寶玉猶恐是夢，忙又將身子欠起來，向臉上細細一認，只見他兩個眼睛腫的桃兒一般，滿面淚光，不是黛玉，卻是那個。寶玉還欲看時，怎奈下半截疼痛難禁，支持不住，便嗷啣一聲，仍就倒下，歎了一聲，說道：「你又做什麼跑來！雖說太陽落下去，那地上餘熱未散，走兩趟，又要受了暑。我雖然捱了打，並不覺疼痛。我這個樣兒，只裝出來哄他們，好在外頭佈散與老爺聽，其實是假的。你不可認真。」此時林黛玉雖不是嚎啕大哭，然越是這等無聲之泣，氣噎喉堵，更覺利害。聽了寶玉這番話，心中雖有萬句言詞，只是不能說得半句，半日方抽抽噎噎的說道：「你從此可都改了罷。」

突然また誰かが自分を搖さぶるのを感じ、朦朧とした中に、誰かの泣き聲が聞こえます。寶玉はハッと夢から醒め、目を見開くと、その人とは餘人ならぬ林黛玉ではありませんか。寶玉はなおも夢かと疑い、あわてて體をぐっと起こして、つぶさに顔を見定めると、その兩の目を桃のように腫れ上から

林黛玉論（小濱）

せ、顔中涙に濡れておりこそすれ、これが黛玉でなくて誰だと言うのでしょうか。寶玉はもっとよく見ようとしましたが、下半身の痛みはどうにもこらえようがなく、體を支え切れずに「アア」と叫ぶなりものようにくずれおち、そこでため息をついてこう言いました：「どうしてまたかけつけていらしたの？ お日様は沈んでも、地面の餘熱はそのままでですから、行ったり来たりなざると、また暑氣に當たっちゃいますよ。わたしは打たれましたが、痛くなんかありません。この様子はね、そのふりをしてあの人達を騙し、表にまで廣まって父上のお耳に入れば幸いというだけのことで、ほんとうは嘘っぱちなんです。本氣になんかしちゃ駄目ですよ。」この時林黛玉はワアワア泣いていたわけではありませんが、聲を殺して泣いているだけに、のどがつまり、もつと辛く感じられます。寶玉の話を聞くと、心の中には言いたいことが山ほどありながら、それが少しも言葉にならないのです。暫くしてやっとシクシク咽びながら言いました：「これからはすっかり心を入れかえて下さいね。」

賈寶玉が打擲された後、林黛玉が登場するのはこの場面が初めてである。既に他の人々の騒ぎは一段落ついており、

賈寶玉は一人寢臺に横たわっていた。賈政・王夫人・賈母はもとより、李紈すらもが泣き崩れるに至った大騒動の後、ひっそりと現われ、思いを言葉にできないまましゃくり上げる林黛玉の姿は他の人々と静・動、或いは求心性・遠心性の鮮かな對照を成している。王熙鳳の來訪を告げる聲にあわてて逃げ歸った林黛玉に對して、賈寶玉は二枚の使い古しの手帕を届けるのであるが、その手帕に託された心遣い（ハシカテ）を林黛玉も探り當て、感動の餘り人の疑いだの思惑だのには構いもせず、手帕に三首の詩をしたためる。脂硯齋の評語を借れば、《兩條の手帕、一片の眞心、三首の新詩、萬行の珠淚》という情景であつた。

第五十七回《慧き紫鵲情辭もて忙玉を試みる》という事件は、林黛玉と賈寶玉の關係にとって特別な意味をもつと思われる。事件そのものは

寶玉本來心實、可巧林姑娘又是從小兒來的、他姊妹兩個一處長了這麼大、比別的姊妹更不同。這會子熱刺刺的說一個去、別說他是個實心的優孩子、便是冷心腸的大人也
要傷心。這不是什麼大病、老太太和姨太太只管萬安。吃

一兩劑藥就好了。

寶玉さんはもとと實直なお人、またちようど林のお嬢さんは幼い頃からこちらへいらしている方であり、二人は一緒にここまで大きくおなり遊ばしたのですから、他の姉妹達とはわけが違います。今度のように熱っぽい口調で一方が行っておしまいになると聞かされましたなら、この人のような實直なお馬鹿さんは言うまでもなく、たとえ冷靜な大人だとして悲しくなろうというものですわ。ともあれこのたびは格別大した病氣でもございませんし、御後至さまもお姉さまもどうぞ御安心なさいませ。お藥の一二服もお上りになればすぐに好くなられますとも。

という薛姨媽の言葉あたりで結着がついてしまふ。《實心的優孩子》——《這不是什麼大病》なる相變らずの感覺である。然しながら、少なくとも事件を引き起こした張本人である林黛玉の侍女紫鵲は、林黛玉に對する賈寶玉の想いの現實的な重みを確かめようとしたのであつた。彼女のホツとしたような言葉が響く。

一動不如一靜、我們這裏就算好人家。別的都容易、最難

得的是從小兒一處長大、脾氣情性都彼此知道的了。

へたにジタバタすることないわ。うちのお屋敷こそが良い嫁
ぎ先なんでも。他のことはみなたやすいとしても、何よ
りも得難いのは幼い頃から一緒にお育ちで、お互い氣心を知
りつくしていच्छるってこと。

替你愁了這幾年了。無父母、無兄弟、誰是知疼着熱的人。
趁早兒老太太還明白硬朗的時節、作定了大事要緊。俗語
說：「老健春寒秋後熱」、倘或老太太一時有個好歹、那
時雖也完事、只怕耽誤了時光、還不得稱心如意呢。公子
王孫雖多、那一個不是三房五妾、今兒朝東、明兒朝西。
要一個天仙來、也不過三夜五夕、也丟在頸子後頭了；甚
至於爲妾爲丫頭、反目成讐的。若娘有人有勢的、還好
些；若是姑娘這樣的人、有老太太一日還好、若沒了老太
太、也只是憑人去欺負了。所以說拿主意要緊。姑娘是個
明白人、豈不聞俗語說的「萬兩黃金容易得、知心一個也
難求！」

あなた様のためにここ何年か心配申し上げてまいりました。
御両親もなく、御兄弟もないたれば、どなたが心から可愛

林 黛玉 論（小演）

がって下さいましょうか。御後室様が頭も體もしっかりなさ
っておいでのうちに早々と、終身の大事をお決めることが
肝腎でございます。諺にも「年寄りの連者はあてにはなら
ぬ」と申します。もし御後室様に萬一の事が起こりますと、
事をやりおおせたとしましても、時期を遅らせたために思い
通りにはいかなくなるかも知れません。王孫公子たるお方は
たくさんいらっしゃいますが、幾人かのお部屋様をお置きに
なって、今日は東へ明日は西へといった風でない方がおられ
ましょうか？ たとえ仙女が舞い降りたといったしましても、
幾晚かお構いになるだけでその後はすっかり忘れておしまい
になり、ひどい場合には妾か侍女なみの取り扱いをなさって、
仇敵同然の有様。もし御實家（もと）に人物が居り勢いもあるという
のでしたらまだよろしいでしょうが、お嬢様みたいなお方
ですと、御後室様御在世のみぎりはまだしも、お亡くなりにな
りましたなら、ただもう人からいいようにされるのが落ち。
ですからはっきりと腹をお決めるのが肝腎と申し上げて
いるのでございます。お嬢様はもののわかったお方ですから、
諺に「萬兩の黄金を手に入れるのはやさしいが、知己とな
るとたった一人でもなかなか得難い」と申すのも御存知の

答。

賈寶玉との關係が自分にとつてもつ現實的な重みを、林黛玉は、全く違った角度から諭されている。賈寶玉との關係が、彼と自分のお互いに對する想いの深さだけによつて守り抜けるものではないということは、林黛玉の考え及ばない所であつた。そしてそのことは、二人の關係をあくまで「婚姻」に引き寄せながら全うさせようとする紫鵲と、賈寶玉との關係を貫くことが、現實的な結果として「婚姻」に辿り着くに過ぎないと考える林黛玉との、微妙ながらも本質的な食い違いを反映しているように思われる。もちろん、賈寶玉その人だけを見つめていたればこそ、強いられた禮教規範が剥げ落ちた、自由なふれあいを保ち續けたことは確かであるが……。

林黛玉と賈寶玉の關係自體が現實性をもとうとすることと、その關係が本當に現實性をもつこととは全く別問題である。

もしも、〈自由〉な一對の男女が、「封建的儒教的家族」の束縛から解放されて、友愛的な〈家〉をいとなむやい

なや、この一對の男女の行手にはふたつの道しかのこされてはいないはずである。ひとつは〈飢える〉自由であり、ひとつは「封建的儒教的家族」と物質的に密通する自由である。²⁰

「癡情の人」としてとらえられることによつて、日常的な禮教規範からの逸脱を默認されてきた林黛玉と賈寶玉の關係が、「婚姻」という、二人の關係に於いては剥げ落ちた禮教規範によつて完全に絡め取られている目標に到達せんとした時、二人の關係に斷を下すものはただ一つ、禮教規範以外にあり得ない。

その時こそ、紫鵲の懸念は實に深い意味をもつて立ち現われて来る。なぜなら、林黛玉には《金玉縁》もなく、林家自體も《護官符》上の四大家から外れている以上、林黛玉の存在などあつて無きが如き部分に於いて、賈寶玉の「婚姻」が裁量される可能性は非常に大きいからである。²¹

従つて、林黛玉が賈寶玉と結ばれたいと願うなら、どれほど賈寶玉と親密であろうとも、事彼の「婚姻」に關しては、自分の存在などあつて無きが如きものでしかなくことを囁

みしめながら、禮教規範に叶う新たな關係作りを始めなければならなかった。然しながら、それこそ紛う方なき「少女」の崩壊ではないのだろうか？

「林黛玉——晴雯」という投影から考えれば、現實の禮教規範への密通を拒んだ林黛玉が、「死」をもって「少女世界」を守り抜いたことは疑いない。そしてそこには、「書き」續けることによって、自らの強いられた情況への隷屬を拒み通さんとした曹雪芹の決意を窺うことができ、更にその背後には、自分の存在があつて無きが如き部分に於いてその存在を主張しなければならぬ人間が、紫鵑の立場に立つことによって、できるだけ有利な形で生き残ろうとする變貌をも含めた、人間の日常的解體に對する曹雪芹のほろ苦い認識が潜んでいることも確實である。

V

先に述べたように、この章では言語の喚起する「像」といった方面から、薛寶釵を形容する言葉と林黛玉を形容する言葉との相違に觸れてみたい。

林黛玉論（小濱）

既に魯迅が述べているように、言語の喚起する像そのものは時代の移り變りの中で變化を遂げざるを得ず、わたしたちのそれは魯迅ともまた違った形で、曹雪芹の言わば「原像」とは到底重ならない。然しながら、薛寶釵・林黛玉それぞれに纏いつく言葉、とりわけ性格を描寫するような言葉に固有のニュアンスは、腦裏に描かれる像が「原像」とは合致しないにも関わらず、有効性を失っていないように思われる。例えば、二人の詩に對する評語を見ていくと、

《詠白海棠》（第三十七回）では

薛寶釵——含蓄渾厚

何とも言えぬ厚味

林黛玉——風流別致

おつな風格

《菊花詩》（第三十八回）では

薛寶釵——到底要算蘅蕪君沈着

蘅蕪君の沈着さすがですね。

林黛玉——巧的卻好、不露堆砌生硬

巧みなのがいいの、生硬に句を積み重ねた所が見えずに。

《柳絮詞》（第七十回）では

薛寶釵——翻得好氣力

（舊套を）覆して大したいきおいですわ。

林黛玉——纏綿悲戚

纏綿たる悲しみ

となっており、更に《桃花行》（第七十回）を林黛玉の作品だと當てた賈寶玉の言葉、

我知道姐姐（『寶釵』）斷不許妹妹（『寶琴』）有此傷悼語句、妹妹雖有此才、是斷不肯作的、比不得林妹妹曾經離喪、作此哀音。

わたしには、琴さんがこうした感傷的な詩句をお作りになることをお姉様が許されよう筈がないとわかってますよ。琴さんにはその才はおありなんです、決してお作りになろうとはなさいません。黛玉さんが、かつて御両親の喪に服された上で、こうした悲しい調べの句をお作りになるのとは、次元が違うから比べることはできないのです。

も、詩の創作に際して現われる二人の性格の違いを物語っている。そしてこうした違いは、薛寶釵に於けるどしりとした安定感、林黛玉に於ける抉るような鋭さとして彼女達の日常生活の中に融け込んでいる。

寶玉便笑道：「寶姐姐、我瞧瞧你的紅麝串子。」可巧寶釵左腕上籠着一串、見寶玉問他、少不得褪了下來。寶釵原生的肌膚豐澤、容易褪不下來。寶玉在旁看着雪白一段酥臂、不覺動了羨慕之心、暗暗想道：「這個膀子要長在林妹妹身上、或者還得摸一摸、偏生長在他身上。」

（第二十八回）

寶玉は笑いながら言いました：「寶釵姉さん、あなたの麝香煉りの赤い腕輪をわたしに見せて下さいな。」丁度寶釵は左の首一つはめており、寶玉にせがまれて、やむなくはずしにかかります。ところが寶釵は生まれつきぼっちゃりとしていたために、そう簡単にははずれません。寶玉は傍で彼女の雪のように白くなめらかな腕を見て、思わずうらやましくなり、ひそかにこう思うのでした。「この腕が黛玉さんについていたら、或いはちょっと撫でる位はできたかも知れないの

だけど、あいにくこの人についているものだから。」

右の文章は、肉體的にもいかにも健康そうな薛寶釵を描寫しており、性格的な安定感と連環を成している。一方、林黛玉のもつ決るような鋭さも彼女自身の肉體に働きかける。黛玉一聽此言、李媽媽乃是經過的老嫗、說不中用了、可知必不中用、哇的一聲、將腹中之藥一概嘔出、抖腸搜肺、熾胃扇肝的痛聲大嗽了幾陣。一時、面紅髮亂、目腫筋浮、喘的抬不起頭來、紫鵲忙上來搥背。黛玉伏枕喘息了半晌、推紫鵲哭道：「你不用搥、你竟拿繩子來勒死我是正經。」

黛玉はこの話を聞くと、乳母の李氏は經驗豐富なばあや、その人が駄目だと言うからにはきつと駄目に違いないと思い、「ワーン」と聲をあげて、飲んだばかりの藥を全部むせてもどし、腸を震わせ肺をかき亂し、胃を火照らせ肝臓をおおらんなばかりの苦しい聲で、何度もひどく咳込みます。みるみる顔は紅潮し髪はサンバラになり、目は腫れ筋は浮き立ち、喘いで頭も上がりません。紫鵲はあわてて馳せ寄って背中をたたきます。黛玉は枕に突つ伏して暫く喘いでいましたが、紫鵲を押しやると泣きながら言いました：「おまえ、たたく

林黛玉論（小濱）

ことなんかいいわ。繩を持って来てわたしをくびり殺してくられたらいいのよ。」

このようにして「像」的なものが特徴的に喚起されると、何でもないような彼女達の行爲が、それぞれにとって象徴的な効果を生ずるようになるのは否めない。

林黛玉聽說、走來瞧瞧、果然一件無存、因向寶玉道：

「我給的那個荷包也給他們了！你明兒再想我的東西、可不能數了。」說畢、賭氣回房、將前日寶玉所煩他作的那個香袋兒——纔做了一半——賭氣拿過來就鉸。寶玉見他生氣、便知不妥、忙趕過來、早剪破了。（第十七、十八回）

林黛玉が聞きつけて、やって来て見てみますと、はたして一物も残っていません。そこで寶玉に對して「わたしのあげたあの荷包まねてまであの者達にくれておやりになりましたのね、明日になってまたわたしのものを欲しがったって、かないませんことよ、」と言い終ると、ブンブンして部屋に戻り、先達寶玉がこしらえるようにせがんだ香袋——半分かた仕上だてがっていたのですが——を腹立ち紛れに取り出すや否や、鉸を入れてしまいました。寶玉は彼女が腹を立てたのを見て、

穩かならずとピンと来て、あわてて追いかけて来てみると、香袋は早くもズタズタになった後。

香袋に入れる鉄の音は短く鋭く響き、餘りに直接的に林黛玉の怒りを體現する。おそらく薛寶釵ではこのような鉄の入れ方は考えられない。

(寶玉) 又道：「姐姐怎麼不看戲去？」寶釵道：「我怕熱。看了兩齣，熱的很。要走，客又不散。我少不得推身上不好，就來了。」寶玉聽說，自己由不得臉上沒意思，只得又搭趣笑道：「怪不得他們拿姐姐比楊妃，原也體豐怯熱。」寶釵聽說，不由的大怒，待要怎樣，又不好怎樣；回思了一回，臉紅起來，便冷笑了兩聲，說道：「我倒像楊妃，只是沒一個哥哥好兄弟，可以作得楊國忠的。」(第三十回)

寶玉はまた「お姉様はどうして芝居を御覽に行かれないのですか？」と尋ねました。寶釵、「暑いのに弱くて。二幕も見るともう暑くてたまりませんの。出て行こうにも、お客様はお引き取りになりませんしね。仕方なく體の具合が悪いということにして出てきたのです。」寶玉がこれを聞いて思わず

ムツとした面持ちになりましたが、やむなくまた照れ笑いをして「道理であの連中がお姉様のことを楊貴妃になぞらえるのですね。やはり肥った方は暑がりなんでしょう。」と言いました。寶釵はこの言い草を聞くや、思わずカッとしましたが、どのようにかしてくれようと思っても、またどれもまずいし、思い返すうちにも顔が火照ってききましたので、フツツと冷笑してこう言いました：「わたくしが楊貴妃のようだとしましても、頼り甲斐のある兄や弟なんて一人もおりませんわ、楊國忠のつとまりそんな……。」

薛寶釵の怒りは《冷笑了兩聲》の中で角が取れていく。低くくぐもった笑いは林黛玉の鉄の音と對照的と言えそうである。林黛玉の聲はより高く、薛寶釵の聲にはより幅があると想定してもあながち見當外れではあるまい。林黛玉の怒りは、高い聲・鋭い言葉・苦しい氣な瘦身によって能う限り表現され、逆に薛寶釵のそれは、幅のある聲・慎重な言葉・健康的な肉體によって能う限りとげとげしさを削り落とされていく。林黛玉は精神的緊張感をいやが上にも高めようとし、逆に薛寶釵は張りつめてしまうことを回避しよ

うと心掛けているように思われる。

言語の喚起する「像」は、時代的限界と個人的経験の多様さによって様々な形を呈するものである。従つて各自の脳裏に描かれる像を導き出す言語もそれぞれに異なることは言うまでもない。此處では、薛寶釵の安定感と林黛玉の緊張感を彼女達の「像」を生み出す基本的感覚と考え、いささかの例を擧げてみた。少なくとも、言語の喚起する「像」として、二人が對照的な位置を占めていることは認められるかと思う。

VI

現実と次元を異にし、それと遂に噛み合ふぬ「異質さ」を守り抜くことによつて、林黛玉と賈寶玉の關係は悲劇として描きつくされんとした。その物語をわたしたち自身に引き寄せて考えた時、いったんは日々様々な形で自らの相對性を痛感し、それによつて幻想を抱きながらも、日常生活を積み重ねる中でその幻想をあつさりとは切り捨ててしまふという變貌を遂げる結果、結局は林黛玉と賈寶玉が擔つ

林黛玉論(小濱)

た悲劇には到底及ばないという現実の貌も浮かび上がつて來そうである。わたしたちはいつしか自分の抱く幻想を自分の手で早目／＼に切り捨てて、日常生活に埋没していくのだろうか？ とすれば、そこにこそ、多くの讀者達が林黛玉と賈寶玉の《癡》に雪崩れ込んでしまひながら、しかもただそれだけに止まり勝ちな原因が隠されているように思われてならないのだが……。

《紅樓夢》を「青春の書」と規定するならば、わたしたちは自らの強いられた情況がもたらす風化作用に思いを致さねばならない。あるがままの現実、それを越えんとする幻想——作品として「かたち」を成さんとした曹雪芹の認識は、そこまでの作業を強いる筈である。

(補記)

テキストには、兪平伯校訂の《紅樓夢八十回校本》を用いた。

|| 注 ||

- (1) ① 作者自云……今風塵碌碌一事無成、忽念及當日所有之女子、

——一細考較去、覺其行止見識皆出於我之上……雖我之罪固不能免、然閨閣中本自歷歷有人、萬不可因我之不肖、自護己短、一併使其泯滅也。

という言葉は、少なくとも曹雪芹を創作活動に赴かせた要因の一つを語っていることだけは明らかである。なおこの第一回冒頭部分については伊藤漱平氏「紅樓夢首回、冒頭部分の筆者に就いての疑問——覺書——」（東京支那學報第四號）を参照。

② 周汝昌氏は、「自傳說」に基き、その著《紅樓夢新證》「人物考」に於いて、買家と曹家の細部に亘る人物比定を行なっている。

② There is no doubt about Cao Xueqin(曹雪芹)'s intention of making the history of his own family's decline and fall the general background of the novel; but the exact relationship existing between the characters of the novel and the various members of the Cao family is much less certain. Some scholars like Zhou Ruchang (周汝昌) have striven to establish a precise parallelism between the two, but the case for this is extremely flimsy. The commentaries establish beyond doubt that many of the characters are portraits of real people, but it does not follow that the relationships between the different characters in the novel were those of the people in real life whom they represent. (The Story of

the Stone: translated by David Hawkes; Introduction)

(3) 李希凡・藍翎《如何理解寶玉的典型意義》

(4) 林黛玉笑道：「大節下怎麼好好的哭起來？難道是爲爭粽子吃、爭惱了不成？」寶玉和襲人嗤的一笑。黛玉道：「二哥哥不告訴我、我問你就知道了。」一面說、一面拍着襲人的肩、笑道：「好嫂子、你告訴我。必定是你兩個拌了嘴了。告訴妹妹、替你們和勸和勸。」襲人推他道：「林姑娘、你鬧什麼！我們一個丫頭、姑娘只是混說。」黛玉笑道：「你說你是丫頭、我只當你當嫂子待。」襲人笑道：「林姑娘、你不知道我的心事、除非一口氣不來、死了倒也罷了。」林黛玉笑道：「你死了、別人不知怎麼樣、我先就哭死了。」

※ 此處で注目しなければならないのは、林黛玉が、本來的な上下關係を「茶化す」形で「好嫂子」と呼びかけたことに對して、襲人の方も結局同じ態度で應じていく點である。

(5) 注(3)に同じ。

(6) 開口都是書香門第、父親不是尙書、就是宰相、生一個小姐、必是愛如珍寶。這小姐必是通文知禮、無所不曉、竟是個絕代佳人。只一見了一個清俊的男人、不管是親是友、便想起終身大事來、父母也忘了、書禮也忘了、鬼不成鬼、賊不成賊、那一點兒是佳人！便是滿腹文章、做出這些事來、也算不得是佳人了。（第五十四回）

(7) ① 《紅樓夢》一書、始於乾隆年間、後遂徧傳海內、幾於家置一編。聰明秀穎之士、無不蕩情佚志、意動心移、宣淫縱

慾、流毒無窮。至婦女中、因此喪行墮節者、亦復不少。雖屢經查禁、迄今終未絕跡。(汪堃《寄蝸殘贅》)

(2) 《收燬淫書局》のリストにも『紅樓夢』(及びその續作)の名が見られる。

(8) 『紅樓夢辨』〔作者底態度〕

(9) 一九二三年、顧頡剛の序文を伴って出版された『紅樓夢辨』は、一九五二年、『紅樓夢研究』として新たに出版された。

(10) 「自傳説」の首唱者は胡適である。

以上は關於著者曹雪芹の個人和他的家世的材料。我們看了這些材料、大概可以明白『紅樓夢』這部書是曹雪芹的自敘傳了。這個見解、本來並沒有什麼新奇、本來是很自然的。不過因爲『紅樓夢』被一百多年來的紅學大家越說越微妙了、故我們現在對於這個極平常的見解反覺得他有證明的必要了。我且舉幾條重要的證據如下……(『紅樓夢考證』より)

(11) 『紅樓夢辨』〔紅樓夢底風格〕

(12) 前注に同じ。

(13) 『紅樓夢』不僅顯示了在藝術描寫上追求《追踪跡》的現實主義精神、同時也表明了作者追求美好生活的理想。這樣纔使『紅樓夢』在藝術創作上達到了現實主義的高度成就。

(14) 李希凡《曹雪芹和他的『紅樓夢』》

(15) 前注に同じ。

(16) 李希凡・藍翎《論『紅樓夢』的藝術形象的創造》

林黛玉論(小濱)

(17) 李希凡・藍翎《論『紅樓夢』的人民性》

(18) 前注に同じ。

(19) 只見房中又走出幾個仙子來、皆是荷袂飄飄、羽衣飄舞、嬌若春花、媚如秋月。一見了寶玉、都怨謗幻道：「我們不知係何貴客、忙的接了出來。姐姐曾說今日今時、必有絳珠妹子的生魂前來遊玩舊景、故我等久待。何故反引這濁物來、污染這清淨女兒之境？」寶玉聽如此說、便嚇得欲退不能退、果覺自形污穢不堪。(第五回)

はその總括的表現と考えられる。

(20) 李希凡・藍翎『紅樓夢』中兩個對立的典型——林黛玉和薛寶釵

(21) 勸君莫彈食客鈇 勸君莫叩富兒門

殘盃冷炙有德色 不如著書黃葉村

(敦誠「寄懷曹雪芹詩」より)

(22) 第二十七回回目

(23) 注(20)に同じ。

(24) 第一回脂硯齋回前總批

(25) 「寶玉」別人不知我的心、還有可恕；難道你就不想我的心裏眼裏只有你！你不能爲我煩惱、反來以這話奚落堵噎我、可見我心裏一時一刻白有你有你、你竟心裏沒我。

「黛玉」你心裏自然有我。雖有金玉相對之說、你豈是重這邪說、不重我的。我便時常提這金玉、你只管了然自若無聞的、方見得待我重而毫無此心了。如何我只一提金玉的事、你就着

急、可知你心裏時時有金玉、見我一提、你又怕我多心、故意着急、安心哄我。

〔寶玉〕我不管怎麼樣都好、只要你隨意、我便立刻因你死了也情願。你知也罷、不知也罷、只由我的心、方可見你和我近、不和我遠。

〔黛玉〕你只管你、你好我自好。你何必爲我而自失。殊不知你失我自失。可見是你不叫我近你、有意叫我遠你了。

(26) 吉本隆明《情況とはなにか》

(27) 正是從維護這種「家世的利益」出發、賈母·賈政·王夫人等、雖然明知賈寶玉和林黛玉自小就有深厚的感情、還是非要強迫賈寶玉和薛寶釵結婚不可。他們企圖通過賈·薛兩家「親上做親」、繼續加強四大家族「連絡有親、一損俱損、一榮俱榮」的關係、并通過薛寶釵這個封建衛道者來勸誘賈寶玉走上封建「正路」、以便重振門庭、「不枉天恩祖德」。由于林黛玉不屬於四大家族、她經濟上處於「寄人籬下」的地位、思想上又同寶玉一樣敢于違抗封建禮教、因此她就成了四大家族利益的犧牲品、被活活害死了。(柏青《封建家族的興衰》)

(28) 《黃土龍中、卿何薄命》庚辰本脂硯齋評語

一篇誅文總因此二句而有、又當知雖誅晴雯、而又實誅黛玉也、奇幻至此。若云必因晴雯來、則呆之至矣。

(29) 文學雖然有普遍性、但因讀者的體驗的不同而有變化、讀者倘沒有類似的體驗、它也就失去了效力。譬如我們看《紅樓夢》、從文字上推見了林黛玉這一個人、但須排除了梅博士的

黛玉葬花照相的先入之見、另外想一個、那麼、恐怕會想到剪頭髮、穿印度綢衫、清瘦、寂寞的摩登女郎；或者別的什麼模樣、我不能斷定。但試去和三四十年前出版的紅樓夢圖詠之類裏面的畫像比一比罷、一定是截然兩樣的、那上面所畫的、是那時的讀者的心目中的林黛玉。

《花邊文學 看書瑣記》